

i*フレームワークを用いた ゴール指向分析での時間表現

アビームコンサルティング株式会社

根津芳香

ynezu@abeam.com

開発における問題点

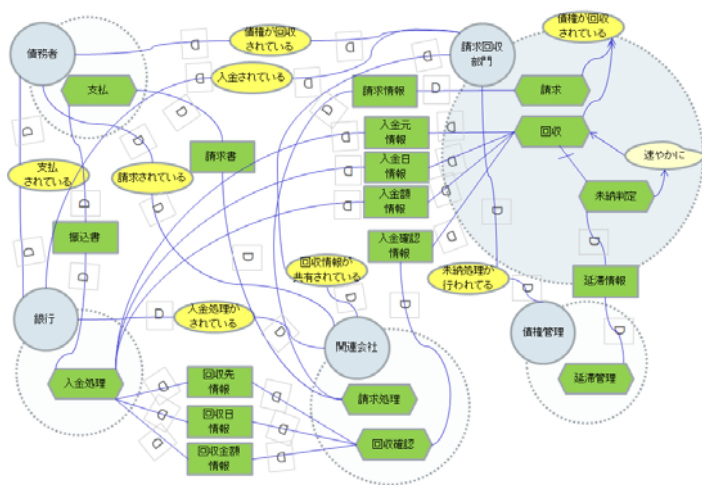
ゴール指向分析手法の1つであるi*フレームワークは、企画・要求定義プロセスでの問題解決のための有効なツールとなり得る。しかし、i*フレームワークによるモデルは静的モデルであり、業務システムで重要な要素である時間に関する問題を把握することができない。

手法・ツールの提案による解決

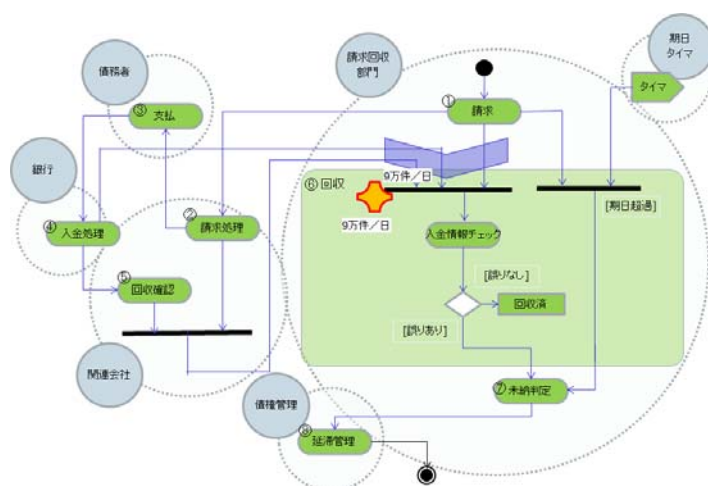
i*フレームワークを補完する記法を取り入れ、時間に関する以下の表現を可能とする。

- 処理の順序性
- 処理タイミング(同期)
- 処理時間(トランザクション量, スループット)

【提案】i*フレームワークを補完するための時間表現



[図1] 戦略論理(SR)モデル



[図2] 時間依存関係モデル

i* フレームワークによるモデルは、複数アクタ間のゴール分析により、アクタやタスクの依存関係が表現される。

アクタやタスク間の時間に関する相互作用を表現する、「時間依存関係モデル」を提案する。

導入効果

時間表現が可能となることで、以下のことが可能となる。

- ◆ 扱う領域の全体像を把握できる i*フレームワークの特徴を生かしつつ、処理の流れやタイミングを把握できる。
- ◆ 業務領域のトランザクションの流量と処理量を表現することで、ボトルネックを発見できる。

残課題と今後の展望

- ◆ モデリングでの属人性を排除するため、ルール・手順の整備が必要。
- ◆ トランザクション量の変化など、新たな時間表現を追加する際に、モデルが複雑にならないような工夫が必要。
- ◆ 生産管理におけるTOC理論など、他分野の知見を取り入れることで、モデルによる問題分析できる範囲が広がる可能性がある。